

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和3年度病害虫発生予察特殊報第3号について（送付）



県内で、トマトキバガのトラップでの誘殺が認められ、特殊報第3号を発表したので送付します。

なお、本情報とトマトキバガに関する注意喚起情報は、病害虫防除所ホームページ（www.jpjn.ne.jp/kagoshima）にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第3号

1 病害虫名 トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick) チョウ目キバガ科

2 発生確認状況及び被害状況

令和4年3月、志布志市のピーマンほ場周辺に設置したトマトキバガの侵入警戒トラップにおいて、誘殺されたガの成虫を門司植物防疫所鹿児島支所が同定した結果、トマトキバガであることが確認された。

現在、県内の農作物における本種幼虫の発生及び被害は認められていない。

3 国内外の発生状況

本種は南アメリカ原産であるが、平成18年（2006年）にスペインへの侵入が確認され、ヨーロッパ、アフリカ、中央アメリカ、西アジア、アラビア半島、インド、ネパール、東南アジアに分布を拡大しており、令和3年5月までに、台湾、中国、中央アジア諸国などでの発生が新たに確認されている。また、国内では、令和3年10月に熊本県で初めて確認され、同年12月には宮崎県で確認されている。

4 本種の特徴

（1）形態

成虫は翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長5mm弱、開張※1約10mm）。前翅は灰褐色で黒色斑が散在する（図1）。後翅は一様に淡黒褐色である。

幼虫は、終齢で約8mmに達する。体色は淡緑色～淡赤白色で、前胸の背面後縁に狭い黒色横帯を有する（図2）。※1翅を広げた時の両方の翅の先端から先端までの長さ

（2）生態

ア 1年に複数回世代が発生し、繁殖力が高い。発生世代数は環境条件によって異なり、南米では年に10～12世代発生することが報告されている。

イ 卵～成虫になるまでの期間は24～38日程で、気温が低い時期はさらに延びる。また、発育下限温度は8℃とされている。

ウ 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。

エ 雌は一生のうちに平均で約260個の卵を寄主植物の葉の裏面などに産み付ける。

オ 幼虫は1齢～4齢までの生育ステージがあり、土中や葉の表面で蛹化する。

(3) 被害

トマトの被害は、葉では内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。

果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに、食害部分の腐敗が生じ、果実品質が著しく低下する。

(4) 寄主植物

トマト、ナス、ピーマン、タバコ、バレイショなどのナス科植物が主要な寄主植物であるが、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。

(5) その他

海外では、ピレスロイド系やジアミド系などの殺虫剤に対する抵抗性を獲得した個体群の発生が報告されている。

5 防除対策

(1) 現在、トマトキバガに対する登録農薬はないが、トマト、ミニトマト及びピーマンでは植物防疫法第29条1項に基づく措置として、別紙に記載された農薬による防除を行う。なお、薬剤防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。

(3) 除去した被害株や被害果などを野外に放置すると、発生源になることから、速やかに適切に処分を行う。

(4) トマトキバガの発生が疑われる場合は、病害虫防除所（099-245-1157）に連絡する。

【写真提供：宮崎県総合農業試験場】



図1 トマトキバガの成虫



図2 トマトキバガの幼虫
右下矢印は前胸背面後縁の黒色横帯



図3 幼虫の食害による被害葉



図4 幼虫の食害による被害果